

## 「滅び」は絶滅ではなく「取り消し」であるという聖書の根拠

まず、「滅び」という語について、ポピュラーな一例として、マタイ7：3を最初に引用します。

「狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。」

-マタイ 7:13

ここで使われている「滅び」という単語は、ギリシャ語 ἀπόλειαν [apōleia](アポレイア)で、聖書中に684回見出されますが、この語の字義は[cut off (En)](切断、切り離される)という意味であり「バインの旧新約聖書用語解説辞典」では、『絶滅(消滅)を意味するものではなく。むしろ、完全な「取り消し」に伴う結果的な損失を強調する。』と説明されています。

つまり、広い門を通った人々は必ずしも「滅ぼされる(命を絶たれる)」わけではなく、天の王国に入ることから退けられるということです。

このレポートでは、ほとんどの場合「滅び」と訳される[apōleia]がどのように文脈で使用され、他の訳語にどんなものがあるかを見ながら、このことを検証してみたいと思います。

「狭い門」に関するルカの記述の方では実際、最後は、こうした表現になっています。

「皆わたしから立ち去れ」と言うだろう。あなたがたは、アブラハム、イサク、ヤコブやすべての預言者たちが神の国に入っているのに、自分は外に投げ出されることになり、そこで泣きわめいて歯ぎしりする。」-ルカ 13:22-29

この、広い門の話のすぐ後で語られている次の聖句も同様の結末を見ることがわかります。

「わたしに向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるのではなく・・・不法をなす者ども。わたしから離れて行け。」-マタイ 7:21-23

受け入れられない故に、離れ去るようにと告げられます。

王国に入ろうと願って来たのに、主に受け入れられず、締め出される、つまり、文字通り「門前払い」にされるということです。

しかし消滅するわけでも、滅亡するわけでもありません。

また、同様の記述として、「王の婚宴」に関する記述の中でも、席に着けず外に出されるという結果で終わります。

『あなたは、どうして礼服を着ないで、ここに入って来たのですか。』しかし、彼は黙っていた。そこで、王はしもべたちに、『あれの手足を縛って、外の暗やみに放り出せ。そこで泣いて歯ぎしりするのだ』と言った。招待される者は多いが、選ばれる者は少ないのです。」マタイ 22：12-14

おそらく、それらの人々は、天の王国に入りそこで千年間、王として支配するつもりだったのが退けられたため、中には、苦々しい感情から背く人もいるでしょうが、少なからぬ人は、思いを改めて調整を受け入れ、「羊と山羊」の羊と同じく天の王国の支配を地上で受ける側の人として千年王国へ導かれることでしょう。

このように、広い門を通る人が「滅びの道」と言われているのは、それまでの入ろうとした願いや、そのために費やした業などがすべて無駄な結果になる。という意味であると結論することができます。

実際、[apōleia](アポレイア)は「無駄」という語に何度か訳されています。

「弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。「何のために、こんなむだ [apōleia] なことをするのか。この香油なら、高く売れて、貧乏な人たちに施しができたのに。」

—マタイ 26:8,9

別の使用例も見てみましょう。

「ペテロは彼（シモン）に向かって言った。「あなたの金は、あなたとともに滅びる [apōleia] がよい。あなたは金で神の賜物を手に入れようと思っているからです。

あなたは、このことについては何の関係もないし、それにあずかることもできません。あなたの心が神の前に正しくないからです。

だから、この悪事を悔い改めて、主に祈りなさい。あるいは、心に抱いた思いが赦されるかもしれません。」—使徒 8:20-22

ここで、お金とシモンが消滅したわけではありません。むしろ、「滅びる」と宣言した後、許される可能性を示しています。

ここでのこの表現の意味するところは、金とシモンの不正な考えが「無効」とであるという意味でしょう。

さて、もっぱら「滅び」もしくはそれと同様な訳し方をされる、このギリシャ語（アポレイア）と、完全な滅亡を意味すると思われる [olethros](オレスロス) という語が同じ文脈の中で記されている次の聖句を考慮してみましょう。

「金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。」-1 テモテ 6:9

滅び=[apolei](アポレイア)

破滅=[olethros](オレスロス)

1 テモテ 6:9 の「アポレイアとオレスロスという語が様々な翻訳でどのように訳されているか比較してみましょう。

「破滅と滅亡」岩波翻訳委員会訳

「滅亡と破滅」新共同訳

「墮落と滅び」前田訳

「滅びと破滅」新改訳

「墮落と滅亡」塚本訳

「滅びと破壊」口語訳

「滅亡と沈淪」文語訳

ちなみに「誘惑と罠」の方はすべての翻訳で同一です。

「破滅と滅亡」とか「滅亡と破滅」という表現ですが、岩波訳や塚本訳では「オレスロス」が「滅亡」と訳され、新共同訳や文語訳では「アポレイア」の方に同じ「滅亡」を当てています。完全に同義語として扱われています。

では今取り上げている [olethros] (オレスロス) の方の使用例も見てみましょう。

[olethros] というギリシャ語の基本的な意味は（殺す、破壊する、失う、死など）であるとされています。

「オレスロス」は聖書中に全部で 4 回使われています。

1 コリント 5:5 / 1 テサロニケ 5:3 / 2 テサロニケ 1:9 / 1 テモテ 6:9

これらの聖句について、同様に各翻訳を比較してみます。

1 コリント 5:5 すべて「滅び」

1 テサロニケ 5:3

「滅び」岩波翻訳委員会訳、前田訳、新改訳、口語訳

「破滅」新共同訳

「滅亡」塚本訳、文語訳

2 テサロニケ 1:9

「滅び」前田訳、新改訳、口語訳

「破滅」岩波翻訳委員会訳、新共同訳

「滅亡」文語訳

「滅び失せる」塚本訳

これらから分かるのは「オレスロス」の語は明らかに消滅、完全に滅び失せるというニュアンスを持つ語以外の単語に訳されることはありません。

確かに、同義語のような、つまり「アポレイア」も滅亡というニュアンスで用いられている部分もあるようですが、「アポレイア」の前置詞「アポ」の基本的な概念は「分離、遊離、停止、脱離」という意味です。

ですから、「アポレイア」と「オレスロス」は完全同義語ではありません。

「誘惑と罫」が同一の意味ではないのと同じく、滅びと破滅も同一の意味の語ではありません。

「アポレイア」がイコール「オレスロス（破滅）」というニュアンスを有する語であるなら、「アポレイア」か「オレスロス」のどちらか一語だけで十分なはずです。

冒頭の記述から明らかなように、アポレイアされた人が必ず「死」を迎えるわけではないことは、聖書中の複数の例から確証されます。

「入ろうとしても、入れなくなる人が多い」

「招待される者は多いが、選ばれる者は少ない」

長年努力して入ろうとして来たのに入れてもらえなかった、確かに招待されたのに自分は選ばれなかったという結末は、確かに多大の消失感を味わうものとなるでしょう。

キリストの追随者としての立場が否定されることは確かに、クリスチャンとしての滅びを意味することになります。

しかし、それは人間として命が絶たれるということではない、ということです。

「羊と山羊」の例え話の羊は、クリスチャンとはならなかった一般人類の善良な人々のことです。（※詳しくは「16 「羊とヤギ」の「羊」とは誰ですか」を参照）

それらの人々は王国を受け継ぎます。つまり千年王国の恵みを享受します。

「入ろう」などとは微塵も思わなかった人、招待に応じる気などサラサラなかった人々が滅ぼされないのであれば、たとえ道を誤ったとしても、「入ろう、招待に応じよう」とした人々の方が不利で、選ばれなかった故に命が絶たれると言うのは筋が通らないでしょう。